2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**摂食障害の子を持つ親の支援に向けた研究** **－分類と発病期間の変化に着目して－**
キーワード	①摂食障害、②患者家族、③家族支援

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	テシマ　ヒロエ 手島　弘恵
配付時の所属先・職位等 （令和３年４月１日現在）	佛教大学 保健医療技術学部 看護学科　助教
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	上に同じ
プロフィール	2009 年に看護師免許取得、京都のいわくら病院に勤務。精神科急性期病棟で働きながら、患者向けの心理教育や、摂食障害の治療プログラムに携わる。2018 年より現職。摂食障害支援団体 NPO 法人 SEED きょうとの家族会のスタッフとして家族の方の悩みや苦しみに触れたことで、当事者の治療だけでなく家族へ何か手助けができればという思いから本研究を行うに至った。

1. 研究の概要

2020 年のパンデミックから始まったコロナ禍において、メンタルヘルスに問題を抱える人は増え、減少しつつあった国内の自殺者数が増加した。本研究で取り上げる摂食障害の患者数もまた、コロナ禍に増加したといわれる。2017 年調査では医療機関を受診した患者は約 29000 人であったが、医療機関を受診しない未受診者が多くいると言われていたことからも、現在の患者数はさらに多いと予想される。

摂食障害は、食事を摂らない拒食症状、大量の食事を摂る過食症状、大量に食べた後に嘔吐など排出を行う、などの症状があらわれる精神疾患である。症状が進み、極端にやせた体型は見た目にも明らかになり、脳や内臓にも大きなダメージを与える。また、精神的な不安定さが目立ち、元の性格では予想できないくらいイライラして怒ったり、時に家族や周囲の人へ攻撃的になることもあることも特徴である。過食後に嘔吐する行為は、食べた物を吐きだすという行為が受け入れがたい事として周囲に指摘されることがある。このような理解され難い症状に、家族は何が起こったのかと戸惑いながら、それでも長期に渡り子どもと関わるうちに疲弊していく。

また、摂食障害の好発年齢である 10 代から 20 代は親元で同居していることが多い年代であり、親が子どもの身の回りの世話をすることが必要な年齢である。しかし、摂食障害の子どもの世話に長く時間をかけている親ほど高いストレスを抱えていることも報告されていることから、子どもの世話をする親もまた、支援が必要な存在である。一方、神経性やせ症の数少ないエビデンスのある治療の一つに、家族療法がある。患者の家族が治療に参加することで患者の回復を促進する治療であり、家族を支援することは患者の治療回復にも繋がると考える。

2. 研究の動機、目的

摂食障害の家族会では、多くの摂食障害の子を持つ母親、父親が参加していた。病院で患者の治療に携わっていた際には、“家族の理解が得られるように、もっと家族が協力してくれるように”と患者が訴え、私自身も同じ様に考えていた。しかし、家族の立場の話を聞くと、発病した娘や息子に何年もかかりっきりで世話をして、高いストレスにさらされながら必死にやってきた姿、なんとかして回復して欲しいが治療の終わりが見えず患者同様に苦しむ姿があることがわかった。これらを背景として、本研究では摂食障害の子を持つ親の困難を明らかにし、必要な援助の示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の結果

摂食障害の子を持つ親、11 名にインタビューを行った。家族会（摂食障害の家族を持つ家族が集まる会）に研究依頼し、協力の得られた近畿・北陸地方にある 3 団体にて調査を行った。インタビューは 1 対 1 で、時間は 1 人につき 90 分～120 分程度、1 度行った。インタビューは感染対策を行いながら対面を基本としたが、一部希望者にはオンラインビデオツールを使用しても行った。摂食障害の娘を持つ母親 10 名、1 名が父親、患者の発症年齢は平均 15.18(10～24)歳、発病から現在までの年数は平均 10.73(4～20)年であった。

データはコード化し、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。「発病によって家族関係が変化せざるを得なかった」、「進路変更など将来への不安を抱く」といった親が子どもの現在だけでなく将来を心配する姿があり、「家族会に参加したことで気持ちが軽くなった」、「家族会で情報を得ることができる」といった家族会の意義を感じていることが明らかとなった。

4. 研究者としてのこれからの展望

初めて質的研究に取り組み、データ収集やデータ分析における基礎的な方法を学びました。今後は臨床で摂食障害の治療に携わってきたことを活かしながら、摂食障害の治療や、患者家族の支援のために出来ることを一つずつ考え実践していきたいと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

申請の際には急いで準備をし、また研究実績のない私には難しいかと思っていましたので、採択された時には非常に嬉しかったです。奨励金は交通費などの調査費用と分析用ソフト等に使用しました。今後も私のような若手、あるいは女性研究者への支援を何卒宜しくお願い致します。